平城宮跡を貫く東大溝
いまむかし

－奈良文化財研究所創立70周年・平城宮跡史跡指定100周年記念特別展展示品紹介－

平城宮の内裏・東区朝堂院と東方官衙地区の間に、南北に貫く大溝（内裏外郭東大溝（SD2700）通称：東大溝）があります。平城宮の主要な基幹排水路であったこの遺構は、昭和３年（1928）、水田所有者の溝辺文太郎が奈良県技師の岸熊吉に依頼し発掘されることになります。平城宮跡における記念すべき初めての発掘調査でした（左下写真）。その後、発足した奈良文化財研究所によってこの東大溝は現在に至るまで継続的に調査されることになります。

昭和、平成、令和と調査を積み重ねた中から、滅多にお目にかけない資料を、奈良文化財研究所創立70周年・平城宮跡史跡指定100周年を記念する特別展「のこった奇跡　のこした軌跡―未来につなぐ平城宮跡―」で出陳します。

昭和３年の調査での遺構検出状況
（溝辺文昭氏所蔵）

内裏に近いという地理的な要因からか、他のエリアでは滅多にみられない、正倉院宝物のような優雅な姿を思わせる資料が認められます。

六弁の花弁形飾鋲（かざりびょう）が残る黒漆の調度品部材、黒漆の太刀の柄頭（つかがしら）、刀装具、銅製の鈴、佐波理（さはり）鋺の破片等……。おなじみの木製の人形（ひとがた）もここでは、金属製の人形とともにみることができます。精巧に作られた立体の人面や鳥形の木製品等の一風変わった資料もあります。

年月をかけて調査が積み重ねられた記念碑的存在の東大溝。その出土品を通じて、過去から未来へとつづく平城宮跡のありように想いを馳せていただけるきっかけとなれば幸いです。

（企画調整部　廣瀬 智子）

東大溝出土の多種多様な出土品